

令和2年度 府立亀岡高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）実施段階

学校経営方針		昨年度の成果と課題			本年度学校経営の重点	
<p>◆学校経営方針</p> <p>生徒一人一人が個性や能力を伸ばさせ、自立的に社会に参画し、人権尊重を基盤として共に支え合いながら、地域社会の一員としての役割を果たすことが求められています。このため、教育目標や教育方針に基づき、各学科、専攻等がそれぞれの特色や持ち味を生かしながら切磋琢磨することで、学校の活性化を図ります。そのため、特に次の3点を学校経営の基本方針とします。</p> <p>(1) 質の高い学習指導と確かな進路実現の具現化 (2) 社会的自立を図るために必要な資質・能力の育成 (3) 地域・保護者に信頼される学校づくり</p>		<p>◆昨年度の成果と課題</p> <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スマートスクール推進事業等を通じて指導方法の工夫や教材の研究を進めることができ、教員同士で高めあうことができた。 ・スマート講座等を利用して専門学科と普通科の交流の機会を設けることで、生徒が互いに切磋琢磨することができた。 ・各学科、コース、専攻の特徴に応じた丁寧な進路指導を全校体制で取り組むことで、生徒の希望進路の実現に貢献できた。 ・学校行事に関わる事前指導や事後指導を充実させることで、生徒が主体的に行動できるようになるなど大きな変容が見られた。 ・高校生としての自覚を高める取組を推進することで、部活動や学校行事でリーダーシップを発揮する生徒が多く出てきた。 <p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校HPやパンフレット、広報資料等の充実を図ったが、探究文理科と普通科美術・工芸専攻の募集状況が目標には達しなかった。 ・総合的な探究の時間等で「Can-Doリスト」の活用を図ってきたが、十分には活かされておらず定着度が高める取組が必要である。 ・問題を抱える生徒への対応を関係諸機関と綿密に連携をとりながら進めてきたが、一部の生徒については深い関わりを築くことができなかった。 			<p>◆本年度学校経営の重点</p> <p>①高い人権意識に基づく教育活動の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校訓「互いに理解し助け合おう」が自然に実行できる生徒の育成 ・教育方針「礼儀正しく、人としての基本を身に付けた生徒の育成」 ・教育方針「規範意識があり、社会性を持った生徒の育成」 <p>②生涯を自らの力で豊かに生きることができるとの力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業後の社会で必要となる力を意識した教育 ・知識や技能だけでなく、学び方（課題発見力、課題解決力等）を育成する教育 ・アウトプットさせることを大切に授業 ・生徒の興味、関心、意欲を刺激する授業 ・教育方針「学力の質が高く、今後も伸びゆく可能性を持った生徒の育成」 <p>③高校生活3年間での伸びを重視</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校訓「自ら進んで自分を鍛え」の実践 ・個々の生徒がどれだけ努力し、どれだけ成長できたかを重視 <p>④高い危機管理意識による組織的対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いじめ、不登校、問題行動等、生徒の状況把握への感度向上と迅速な初期対応 ・迅速かつ適切な報告、関係者間での情報の共有と共通認識 	
評価領域	重点目標	具体的方策			評価	成果と課題
組織・運営	魅力ある学校づくり	1	各学科、クラス、専攻の特徴を活かした高大連携、地域連携等の取組を充実させる。	C	新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、高大連携・地域連携の取組は十分にはできなかったが、中には工夫して実現できたものもあり、生徒の進路選択の可能性を広げ、その実現に役立てることができた。	
		2	探究文理科の初年度の取組を充実させ、次年度に繋げるとともに全校に成果を広げる。	B	亀岡市と連携したプラゴムの取組など地域と連携した取組を実施することができた。その取組を第1学年全体に広めることができたが、全校に広げるまでには至らなかった。	
		3	読書習慣の定着に向けた集中読書や「honstagram」などの取組を更に活性化させる。	C	集中読書などの啓発活動も行ったが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、生徒の図書館利用は低調だった。	
	信頼される学校づくり	4	WEB、SNSなどを効果的に活用し、生徒の学びや成長の様子をこまめに発信する。	B	ツイッターでの情報発信を頻繁に行うことができた。美エインスタグラムにも年間約40件の記事を掲載することができ、生徒の学習や成長の様子を発信することができた。	
		5	中学校等への広報活動を工夫し、全ての学科・専攻で定員を満たす。	A	今年度の広報活動は動画利用などの変更を余儀なくされたが、説明会に参加した中学生や保護者には概ね好評であった。その効果もあってか、全ての学科・専攻で志願者が定員を上回った。	
		6	家庭や地域、関係機関との連携を図り、きめ細かな指導を組織的に行う。	B	関係諸機関との連携を丁寧に行い、個々の生徒に寄り添って本人や保護者が抱える問題の解決を支援し、長欠や原留・中退（転学）を減らすための手立てについて組織的に取り組むことができた。	
教育課程 学習指導	確かな学力の育成	7	基本的な生活習慣の確立と家庭学習習慣の定着を図り、学力の向上を目指す。	B	基本的な生活習慣の確立に向けた指導により、進路実現に向けて主体的に取り組む生徒が増えるなどの一定の成果があった。一方で、家庭学習習慣の定着が不十分な生徒への継続的かつ丁寧な指導が十分にはできなかった。	
		8	生徒の興味関心や意欲を刺激するとともに、アウトプットを重視した授業を実践する。	B	講義中心の授業モデルからの転換に係る研究が、個々の教員のレベルでは広がり始めている。今後は、学校全体として推進するための具体的な取組を検討する必要がある。	
		9	効果的なICTの活用方法の研究を進め、内外に発信する。	B	動画の各教室同時配信など、コロナ禍においても教育活動を継続させる方策を検討・実施した。また、スマートスクールICT活用推進担当が中心となり、公開研究授業を実施し研究成果を内外に発信することができた。	
	ジェネリックスキルの育成	10	「ジェネリックスキル」の取組を充実させて、卒業時にCan-doリスト3級を達成する。	B	3年生2学期末における昨年度との比較では、6つの指標のうち4つで3級達成者が増加した。一昨年度と比べると6つの指標うち5つで増加しており、これまでの取組に一定の成果があったことが伺える。	
		11	「ジェネリックスキル」と総合的な探究の時間の3年間を見通した計画を完成させる。	C	コロナ対応などでイレギュラーな形で総合的な探究の時間を実施したため、3年間を見通した計画を完成させることが難しかった。次年度もコロナに対応しながら制限された活動を実施せざるを得ないため、計画の立案が難しい。	
進路指導 キャリア教育	希望進路の実現	12	各学科、クラス、専攻の特徴に応じた組織的・計画的な進路指導を充実させる。	B	進路関係の取組について、各クラス・コースの進路志望状況を踏まえ、最大限の効果が得られるように工夫を凝らした。一教室あたりの収容可能人数の制限などから、今年度は特に細やかなニーズに応えることが難しかった。	
		13	国公立大学については35名以上（うち推薦10名以上）の合格を目指す。	B	学校推薦型選抜・総合選抜の国公立大学合格者は12名（3/1現在）であった。早期から小論文や面接の指導に多くの教員が携わるなど、組織的に指導を進めることができた。	
	キャリア教育の充実	14	3年間を通じた進路指導・キャリア教育の取組を工夫し、生徒の自立・自律を促す。	C	分野別進路説明会や志望理由書の作成指導等を通じて、生徒のキャリア意識の形成を図ることができた。学習合宿や外部講師による進路講演会等が中止になったが、代替の取組を実施することが難しかった。	
生徒指導 人権教育	学校行事、部活動等の充実	15	部活動への積極的参加の指導を通して、健全な心身の発達を目指す。	B	学習と部活動との両立を目指す指導を継続して行い、一定の成果があった。年度当初の臨時休業のため、特に新入生の部活動への円滑な加入が心配されたが、結果としては例年通りの加入率となった。	
		16	体育・スポーツ活動や芸術文化活動の活性化と学校行事及び特別活動の充実を図る。	B	コロナ対応により当初の計画通りには進まなかったため、生徒に十分な達成感を与えることができないのではと懸念されたが、そのような中でも生徒は様々な課題に創意工夫して取り組み、どの取組も充実したものととなった。	
	生徒の自立・自律	17	生徒が主体的に学ぶ仕組みを作り、自らの力で学校生活を充実させる力を身に付けさせる。	B	生徒の主体性を育成するために、3年間を見据えた指導計画を立て実施した。その結果、学校行事等において仲間と協力して積極的に活動する姿が見られた。上級生の下級生に対するリーダーシップも十分に発揮できていた。	
		18	研修旅行等の学校行事において、生徒自身が深い学びを得ることを見据えた指導を行う。	B	新型コロナウイルス感染症の影響により、研修旅行については新しいプランに変更して実施した。常日頃の取組が研修旅行での「主体性」「自律」につながると考えながら指導してきた結果、一定の成果を得ることができた。	
	豊かな人間性の涵養	19	規範意識を涵養し、基本的な生活習慣の確立、帰属意識の高揚を図る。	B	全校集会の形態がとれないため、規範意識等の指導は各ホームルームで行った。基本的な生活習慣の確立に繋がる「授業」「課外活動」「家庭学習」「十分な休養」のサイクルを意識させる指導に重点を置き、一定の成果があった。	
		20	自他の生命や人権の尊重を基盤とした正しい判断力と実践力の育成に努め、人間としての在り方・生き方を深く考えさせ、社会の一員としての自覚を促す指導の充実を図る。	B	様々な取組が縮小・中止になったため、当初の計画を変更せざるを得なかった。人間としての在り方・生き方を考えさせることはできたが、考えを深めさせるような指導の時間までは確保できなかった。	
		21	人権学習を工夫改善し、人権問題を自らの課題として捉え、解決に向けて実践する姿勢を身に付けさせる。	B	講演・講義を中心とした従来の形態を、より能動的で主体的に取り組むことのできるグループワーク等の形態に切り替え、様々な人権課題を自らの問題として捉えることができた。	
	教職員の意識向上	22	教育相談会議、特別支援会議を充実させ、支援計画などを基に連携を密にし、包括的に援助を行う。	B	各分掌、家庭と連携し、各種会議を実施し、適切な支援・配慮を行うことができた。また、必要に応じて外部機関とも連携し、様々な視点から包括的に援助を行う体制の構築に努めた。	
23		高い人権意識に基づく教育活動の実現に向け、教職員研修の充実を図る。	B	「同和教育の成果と手法」への理解を深めるとともに、ベテラン教員から若手教員へ指導のノウハウ継承をテーマとした教職員研修や意識調査アンケートを実施し、教職員の人権意識を高めることができた。		
新型コロナウイルスへの対応	安全、安心の確保	24	新型コロナウイルス感染防止に向けた環境整備と校内推進体制を構築し、安全で安心な学校作りを進める。	B	府の通知等に基づき、部長会議、職員会議で共通認識を図りながら感染症対策に向けた環境整備を行うことができた。スクールサポートスタッフの活用も図ったが、適任者が見つからない等の課題があった。	
健康・環境 美化	生徒の意識向上	25	美化委員会、保健委員会を充実させ、生徒が自主的に保健と美化の意識を高めるように指導する。また、清掃の徹底と用具の整備に努める。	B	新型コロナウイルス感染防止に向け、定期的に美化委員会を行い、美化委員が率先して清掃、整備に努めた。保健委員会では換気の啓発活動を実施した。	
		26	健康診断の経過観察、事後指導を充実させ、生徒の健康管理、生活習慣の改善に努める。	B	健康診断終了後、適切な時期に結果の通知を行い指導することで、生徒の健康管理の維持、生活習慣の改善につなげることができた。	
教育環境 の整備	修学・進路支援を進める広報の充実	27	生徒・保護者に向け、安心して在学でき、卒業後の進路実現の一助となるよう、就・修学支援に係る援護制度について、的確な情報提供を行う。	B	奨学のための給付金の申請機会を逃すことがないよう、未申請の該当生徒の保護者に制度の説明を電話連絡等で漏れなく行うなど周知に努めた。玄関モニター等でPR動画を生徒、来訪者に対して放映した。	
		28	清潔な学習環境を保つ清掃・衛生管理を実施し、常に課題意識や危険予測をもった施設・設備の維持管理を行い、修繕箇所を早期に発見・対応する。	C	教職員一体となって日常的な危険箇所の早期発見と不良箇所への対応、修繕に努め、清潔で安全な教育環境の維持管理に努めた。安全・安心な施設・設備を担保するよう、今後とも改善への不断の取組が必要である。	
研究指定等	府立高校特色化事業（スーパーサイエンスネットワーク京都校）、高校生伝統文化事業（京の文化継承・価値創造推進校）					
評価	A:十分達成できている(目標以上の成果が得られた) B:ほぼ達成できている(ほぼ目標どおりの成果が得られた) C:達成できているとはいえない(成果はあったが、目標に達していない) D:ほとんど達成できていない(ほとんど成果がなかった)					
学校関係者評価委員会による評価	新型コロナウイルスの影響で様々な取組が制限されたことから、当初の目標が実現できなかった項目があることはやむを得ないと思われる。一方で、全国的にオンラインでの講義などリモートでの学びが一気に加速しており、亀岡高校においても対面とリモートのバランスを考えた教育活動が進むことに期待したい。また、令和3年度からコミュニティ・スクール制度を導入するというので、地域との連携が今まで以上に活性化することが望まれる。亀岡高校の生徒が母校を誇りに思うと同時に、地域からも誇りに思われるような学校づくりを目指してほしい。					
次年度に向けた改善の方向性	評価がCの項目については、具体的な改善策を年度当初に検討し、速やかに改善を図っていきたい。評価がBの項目についても、現状に満足するのではなく、より良い取組ができるようPDCAサイクルの確立を図っていきたい。評価がAの項目については、今後も継続して成果が出せるように、学校体制の整備に努めていきたい。					